

スライド	説明
1	<p>私たち、十勝川中流部市民協働会議は、十勝川相生中島上流湿地という場所で湿地再生による河道内の再樹林化抑制と自然環境の多様化を行っています。この場所での一連の活動が SDGs への貢献となるのではないかと考えました。</p>
2	<p>SDGs とは、持続可能でより良い成果を目指す開発目標のことで、17 のゴール目標と 169 のターゲットで構成されており、当会としてはこの中から 13・15・17 の目標について取り組むことにしました。</p> <p>当会としての SDGs に対する考え方は以下の 2 点です。</p> <p>1.SDGs を美しいスローガンにするのではなく、数値指標と具体的な行動の課題別に明確化する。</p> <p>2. 進捗率と進むべきベクトルを定期的にチェックしながら行動する。</p>
3	<p>目標 13 : 「気候変動に具体的な対策を」 行動としては再樹林化を防止しつつ湿地・草原環境を維持することで、再繁茂するヤナギ林の伐採量を減らしその工事に伴う温室効果ガスである二酸化炭素の排出量を抑制します。目標としては 2030 年までに温室効果ガスを 45%削減させます。</p> <p>目標 15 : 「陸の豊かさを守ろう」 行動としてはヤナギ単層林から多様なハビタットへの変化で創出した、生物の多様性を維持します。目標としては、湿地環境の創出により 49%増加した生物種数を 2030 年まで維持させます。</p> <p>目標 17 : 「パートナーシップで目標を達成しよう」ということで、行動としては川づくりにおけるアイヌ民族とのパートナーシップと民族文化伝承への協力をします。目標としては、アイヌ民族の伝統儀礼の際に使用するゴザの原料であるガマを毎年 32.4 m<sup>2</sup>程度のゴザを制作できる量の提供をし続けます。</p>
4	<p>SDGs について当会が一連の取り組みを行う十勝川相生中島上流湿地は、十勝川と札内川の合流地点付近にあり、再樹林化防止のため掘削されたことにより形成されました。その後平成 26 年から地元高校の帯広農業高校の生徒と連携しての魚類調査を開始しました。平成 28 年の台風では増水によって土砂堆積が発生し水域が半減してしまいました。ですが、平成 29 年から半減した水域の拡大を目的に掘削作業を行っています。</p>
5	<p>目標 13 : 「気候変動に具体的な対策を」 当会では、伐採工事の際に排出される温室効果ガスである二酸化炭素の排出量に着目しました。現在の環境を維持していくことによって伐採するヤナギ林を減らし、温室効果ガスを抑制します。当会が聞き取りなどを行い、20 年間放置した場合に排出される温室効果ガスの量を算出すると、伐採工事に伴う各工程で排出される温室効果ガスの合計は 24.01 t となりました。しかし、当会で再樹林化を防止するための作業を 20 年間続けた際に排出される温室効果ガスは 13.42t となり、2 つを比べると 45%の削減となりま</p>

5	<p>す。今後の活動としては、温室効果ガス抑制のためヤナギ幼木の処理と湿地環境維持のための掘削作業を継続して行います。</p>
6	<p>目標 15：「陸の豊かさも守ろう」十勝川相生中島上流湿地は元々ヤナギ単層林でしたが、湿地の造成に伴い多様なハビタットへと変化したことで生物の多様性を創出することができました。湿地の造成前と生息する生物種数を比べると 138 種から 205 種となり 49%増加しました。49%増加した生物種数を 2030 年を目標年に定め維持していきます。今後の活動としては、台風により半減した水域の面積拡大と多様な水深の創出を行います。</p>
7	<p>目標 15：この湿地では地元高校生と連携して魚類調査を平成 26 年から継続して行っています。今後も実践教育へのフィールドの提供をしていきます。</p>
8	<p>目標 17：「パートナーシップで目標を達成しよう」アイヌ民族と連携し、民族文化の伝承に協力していきます。そこで、近年生育地が不足し確保が困難となっているガマの提供を行います。ガマはアイヌ民族が使用するゴザの原料になるもので、十勝川相生中島上流湿地にはガマが密生して生育している群落があり、その生育面積を拡大し十勝管内のアイヌ民族の団体が希望する数量を提供していきます。年間で 32.4 m<sup>2</sup>程度（20 畳分）のゴザが制作できる分が必要とのことで、継続して提供できるよう、当会で生育面積を拡大し、ガマの生育面積を協働で維持していきます。また、ガマの刈り取りやゴザ編みなどを地元高校生と連携することによってアイヌ民族の文化伝承と高校生のアイヌ文化に対する理解を深めることにつなげていきます。</p>
9	<p>ガマ生育面積ですが、アイヌの方たちは収穫の際に必要な量を獲るのではなく復元可能な量しか獲らないそうです。この聞き取りの結果、10%の採取にすることで復元可能とのことでした。継続してガマを提供し続けるために必要な面積は、1523 m<sup>2</sup>となりましたが、現在の十勝川相生中島上流湿地には 1358 m<sup>2</sup>しか生育していません。そのため、今後の活動としては、必要なガマ生育面積の確保に向けての掘削作業を行い、併せてアイヌ協会と地元高校生とのパートナーシップと民族文化伝承に協力します。</p>
10	<p>今年度の十勝川相生中島地区での活動計画です。</p>